

氏 名	周 逸喬
学 位 の 種 類	博士（美術）
学 位 記 番 号	第 137 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	ジェンダー意識を記号として取り込んだ漆造形表現
審 査 委 員	主査 教 授 栗本 夏樹
	教 授 加須屋 明子
	准教授 笹井 史恵
	特任教授 上野 真知子
	前崎 信也（京都女子大学 教授）

## 論 文 の 要 旨

本論文は周逸喬の学位申請論文『ジェンダー意識を記号として取り込んだ漆造形表現』であり、第 1 章「博士課程の制作に至る経緯」、第 2 章「中国のジェンダー問題について関心の所在」、第 3 章「ジェンダーを表現する漆の作品（先行事例）」、第 4 章「イラスト作品から取られた手の記号」、第 5 章「博士課程作品制作（前半）」、第 6 章「博士課程作品制作（後半）—3D プリンター胎における作品」の全六章で構成される。本論文は、筆者の個人のアイデンティティーから出発し、中国の特別なジェンダー意識が読み取れる身体部位に焦点をあて、「蘭花指」という手のジェスチャーに変遷した経緯を考察し、それを一つの記号として作品に取り込み、3D プリンター胎を用いた作品制作について論述したものである。

以下、章立てに沿って概略を記す。

### 第 1 章 博士課程の制作に至る経緯

論文の最初はまず、博士課程に入る前に制作した自作の検討を重ねていき、作品の類似点や相違点を比較した。中国の大学で主に制作した漆平面作品のやり方に、日本の大学で学んだ乾漆技法や新技術を応用し、制作した立体造形作品までの経緯を述べた。各節には時系列に沿って博士課程の研究と繋がりがある作品を取り上げた。

- ・ 第 1 節 《小さな劇》（2017）20 点—具体的な人物像 1

学部四回生時（2017）の卒業作品で、中国明の時代の文学作品『金瓶梅』をテーマにし、人間の

手や足をモチーフにした作品である。

- ・ 第2節 《粧》(2018) 5点—具体的な人物像2

京都市立芸術大学の研究留学生時代(2018)の作品で、中国清朝中期の時代に書かれた文学作品の『紅樓夢』をテーマにし、化粧している男女を表現する作品である。

- ・ 第3節 《足器》(2018) 9点—足の記号表現

研究留学生時代(2018)のもう一つの作品で、古代中国の纏足の風習からインスピレーションを得て、小さい足の形をモチーフにした乾漆の器の作品である。異なる歴史と文化から、足という身体部位に性的な妄想が存在し、それによって、特定の背景において足は女性性の象徴の記号になったことを考察した。

- ・ 第4節 《あずき》(2019) 4点—具象的な人物3

修士一回生時(2019)の作品で、中国の詩詞の中で女性の恋愛感情を表す紅小豆をモチーフにし、金の蒔絵で描いた女性の体と白い肌の手を対比する作品である。第1節から第3節までの作品より抽象的な手の記号を際立たせるように試みた。

- ・ 第5節 《相》(2021) 9点—記号表現と立体の融合

修士課程の修了作品は尼僧をモチーフにし、展示する場所に合わせて、3Dプリンター胎を用いて原型を作った。この作品によって、樹脂の原型をプリントアウトしてから上に漆を施すという制作方法が博士課程での制作意識に影響を与えたことも明示した。

- ・ 第6節 《煩惱1、2、3》(2021) —イラストレーションから漆作品に変換するきっかけ

漆立体作品を制作することの延長として、実際の社会活動により得た知識や社会問題をもとに、生まれたインスピレーションでイラストレーションを描いた。また、そのイラストレーションの図案を出発点として漆作品を制作するという過程をより明確にした。

## 第2章 中国のジェンダー問題について関心の所在

ジェンダーや女性性に関する作品は、女性の身体や、性器などをモチーフにする作品が多い中、筆者が博士課程の作品テーマである人間の手をシンボルとして作品を制作する理由を述べた。また、中国文化によって生まれた特別な記号と女性性を結びつけ、作品にする意図を論じた。

- ・ 第1節 中国近代のジェンダー問題に注目し、身体に関わる問題について創作するアーティスト  
ジェンダー意識や問題を抱え、身体に関わる数点の作品を先行作例として考察した。

- ・ 第2節 蘭花指という記号に含む女性性のリサーチ

「蘭花指」という手のジェスチャーに対する人々の認識の変化に注目した。筆者の興味点である手の形について、仏教の印相から京劇の手振りまでの経緯をリサーチした。

- ・ 第3節 「蘭花指」の女性性とミソジニー

「蘭花指」の手の記号に含まれる女性性について掘り下げた。現代の人が「蘭花指」のジェスチャーをすること、または男性が女性らしい動きをすると受けるネガティブな評価の本質はミソジ

ニーが原因であることを考察した。

### 第3章 ジェンダーを表現する漆の作品（先行事例）

主流である漆という素材の美を最大限に表現することを意図して制作する作家達と、一部であるが、漆を用い精神性を感じさせる作家達、また、自分のメッセージと主張を作品に入れ、漆で今日的な表現をする作家たちの中で、筆者の立ち位置を確認した。

- ・ 第1節 漆の素材性を中心に表現している漆造形作品

ジェンダーをテーマにする作品を論じる以前に、まずは、主流である漆の素材性を中心に表現する漆造形作品を取り上げた。

- ・ 第2節 女性をモチーフにする漆造形作品

筆者の作品と類似して、女性をモチーフにする漆作品を論じた。特に、同じく一つの記号を重複して、ハイヒールや、唇、異なる女性像などを用いて、女性性を表す漆作品に注目した。

- ・ 第3節 女性の作家とジェンダーをテーマにする漆造形作品ー日本と中国の漆アーティストの取材に基づいて

「女性漆芸家」のタイトルで日本と中国で展覧会を開催し、参加した二人の女性漆作家に取材した。取材内容から、より女性作家として考えることや、女性をテーマにする作品の理由を明らかにした。

### 第4章 イラスト作品から取られた手の記号

筆者は修士課程の制作から、自分のイラストをもとに、漆平面作品のデザインや加飾、漆立体作品の造形を考えている。本論文の作品のモチーフである手の形がシンボルマークになる経緯を述べた。

- ・ 第1節 膨らむ人物

自身のイラスト作品に影響を与えたアーティスト、フェルナンド・ボテロの作品を取り上げて考察した。

- ・ 第2節 手にフォーカスした作品ー「台所の手」の展示

イラストは筆者の特徴を作品にする手段として必要だと考えられるため、本節からは各イラスト作品における展示とコンセプトを紹介した。筆者の初のイラストレーション作品の展示で、単独の手のイラストから膨らむ手の様式を確立することを明示した。

- ・ 第3節 中国の記号を取り込むイラスト作品

博士課程に入ってから平面のイラスト作品を描くことによって、少しずつ自分の様式を確立した。特にイラスト作品に使用した切り紙模様と不織布の繊維素材をどのように漆作品に使用したかを重点的に述べた。

## 第5章 博士課程作品制作（前半）

博士課程における実際の作品制作について論じ、第5章の前半と第6章の後半に分けて説明した。前半では、単独の手をモチーフに、漆加飾の技法を用いて、漆平面作品を制作する。特に、中国の儀式に使う装飾用の不織布を漆で貼ることによって、特別な変わり塗りの模様ができるという新たな漆加飾方法も試みた。

- ・ 第1節 《The gender of hand》(2021)9点—単純な手の形に抽象的な加飾を加える

本作品では修士課程にて試行錯誤を行って、様々な女性の姿をモチーフにして制作した作品から、最初に単純な手のモチーフを取り上げてみた作品である。

- ・ 第2節 《蘭花指 I》(2021)14点

第1節の《The gender of hand》(2021)の延長として、「蘭花指」のジェスチャーをモチーフにして、小さい手の形の板の上に、様々な漆の加飾技法を応用した平面パネル作品である。仏教の印相と蘭花指に基づいた形を用いた。

- ・ 第3節 《蘭花指 II》(2022)11点

変形する板のパネルを用いて、京劇の中によく表現されている封建社会の悲劇の愛憎をテーマにした漆パネルのシリーズ作品である。主に中国文化に通底していることといえる「喜」という漢字を加飾デザインとして使い、この漢字の裏にある社会の現状と問題を漆で封じ込める意味を持たせている。また、厚みがあり、図案をもとに切り取られた不織布を漆の伝統的な布貼り技法で貼り、上に色漆を用いる変り塗りに近い独創的な加飾技法を試みた。

## 第6章 博士課程作品制作（後半）—3Dプリンター胎における作品

3Dプリンター胎を用いた漆造形作品の制作に関する研究成果を述べた。

- ・ 第1節 《双囍 (Shuangxi)》(2022)5点—蘭花指の立体作品

第5章で制作した平面作品の延長として、「蘭花指」の記号をリピートして表現するため、3Dプリンター胎を利用した。また、中国儀式によく使う「囍」（ダブルの喜び）の文字、牡丹の花、などの民俗的な模様を漆で貼り付け、相反するイメージを固定した。

- ・ 第2節 日本と中国の3Dプリンター胎作品

日本で類似する3Dプリンター胎を使う作例を取り上げた。そして、中国の美術大学の先生への取材を通して、中国での3Dプリンター胎を使用する現状を調査した。

- ・ 第3節 《手瓶》(2023)5点—瓶に挿す蘭花

第1節の作品の《双囍 (Shuangxi)》(2022)を制作する同時に進行する作品シリーズである。作品を支える木の台座を漆造形作品の一部として考え、花瓶をモチーフにした台座を制作した。

- ・ 第4節 《浸染》(2023)3点—本漆とウレタンに対する比較、考察、試み

ウレタン下地を使用する漆の吹き付け塗装を試みた。京都の吹き付け漆の職人と協働し制作した作品から、今後の筆者の作品制作に新たな可能性を提示した。

・ 第5節 本審査に提出する最新の作品ーイラストを基にした漆立体作品

蘭花指が現代人に対する女性性の意味と女性性をポジティブに表現する形容詞をテーマに、単独の手ではなく、半身像の漆造形作品を制作した。そして最後に、漆造形作品に共通する人物の形をバルーンの素材で再構築し、パブリックアートの作品を制作し発表した。筆者の今後の作品制作と作品発表する場所に新たな展開を生む刺激となることも考えられる。

以上の論述を踏まえて「結論」では、これまでの作品制作の変遷から、筆者は漆の素材性に焦点を当ててではなく、「漆を使ってメッセージを伝える」の立場から、中国文化におけるジェンダー意識が含む記号を使用し、手のジェスチャーをリピートすることを試みた。それが実は自身のアイデンティティを強調することと同じであることを明らかにした。「ジェンダー意識を記号にする」を中心軸として、「蘭花指」のジェスチャーにある古代から現代にわたる女性性に対する意識の変遷を考察した。

筆者の博士課程における研究と制作をまとめた本論文は、特に「蘭花指」というジェスチャーの変遷を通じて、ミソジニーの影響を受けた記号を中心に、その関連作品の制作を明確にした。独自の写実的アプローチとして、まず、イラストから漆平面作品への変換、その後、3D プリンター胎を漆造形作品に応用し、最終的には漆造形作品が存在するから実現できる「蘭花指」モチーフを継承する大規模なバルーンのインスタレーション作品が出来上がった。この過程において、筆者は漆に限らず様々な表現手段を用いた作品を通して、自分の世界観を表現しているが、漆から離れることなく、それぞれの素材の特性を連携させることで、作品を豊にして拡張していきたい。イラストの表現力を持つ漆作品は、今後も多様な素材を通して、ポピュラーになっていく可能性を持ち、その可能性に期待し努力を続けたい。

さらに、漆に新しい視点や方法論を探求する一方で、漆から多様な素材への転換やコラボレーションなど、新たな展開の可能性が明確になった。今後も漆を通じて様々な素材を連携させ統合して新たな漆造形表現の可能性を探究していきたい。

## 審査結果の要旨

周氏の博士論文は全6章からなり、北京工業大学の卒業制作から、京都市立芸術大学の修士課程、博士（後期）課程での氏の漆芸作品の制作と、制作に関わる背景やコンセプトについて時系列に沿って解説している。論文全体を通して、中国において女性の性を象徴する身体的部位としての足と手をモチーフに、現代中国では未だ意識されることの少ない女性に求められる立場や、女性に向けられてきた眼差しについての問題提起を展開している。大学院進学後の主要テーマとしてきた手の表現に関して、氏は価値ある論を展開している。まず、仏教の印相と京劇の蘭花指との関係を指摘している。そして、中国の清代以降に劇場の舞台に女性が上がるのが禁止されたことで、男性が女性を演じる必要が生じたことや、その過程で男性演者が女性を表現する手段として蘭花指が考案されたことを明らかにした。このような背景を踏まえて、氏は手をモチーフにした作品を媒介として、旧態依然とした役割を求められる現代女性の立場に対する理解を要求している。制作については、伝統的な漆芸技法を使いこなせるだけの高い技術力を有していることが評価できる。さらに伝統的な技法にこだわらず、アクリル絵具を使用したイラストレーションの制作、不織布の利用、3DCGでの設計、3Dプリンター胎の活用など、漆と異素材との融合に積極的に取り組んでいる。その結果、既存の漆芸作品にはあまり見られない質感の表現、制作スピードの効率化を達成している。さらにバルーン作品に至っては、漆芸の制作で培った造形感覚を生かして、傷つきやすく紫外線に弱い漆では困難な、大型作品を用いたパブリックスペースでのインスタレーションを成功させた。

本審査所見では、審査教員から以下の意見があった。

1、自らの実感から出発しつつも、漆という素材の魅力を活かしつつ、女性性というテーマと取り組み、また改めて中国と日本という両国の文化的背景について考察を深めながら、蘭花指の持つ記号性を活かし、鮮やかでポップな色彩を用いて漆造形の可能性を押し広げている点は高く評価できる。

2、本審査としては、タイトルに沿った結論がやや不足していると感じたが、リサーチは幅広く十分な量を行なっていると言える。

3、制作については、伝統的な漆芸技法を使いこなせるだけの高い技術力を有していることが評価できる。また、漆と異素材との融合に積極的に取り組んでいる。

4、修士課程での足の制作から博士課程で手の制作に移行して、一貫してジェンダー表現を自国の文化を背景に表現しようとする姿勢は評価できる。ただしその先に自身の立ち位置を確認して、問題を発見し答えを導き出す過程がやや不足していると感じる。

5、論文内容は、母国語でないにも関わらず、芸術論を構築していて、分かりやすくまとめようとしている。また、公開審査では、パワーポイントできれいに作成された資料を用いて、作品の特徴を丁寧に発表していた。しかし、質疑応答では、適切な回答を示すことができない点もあった。すなわち、論文タイトルの「ジェンダー」というキーワードについて、論文中では、肯定的に論じているところと、否定的に論じているところが混在していて、周氏の中ではっきりしていない点があった。このことについては、論文タイトルの重要キーワードでもあるので、論文の最終提出までに修正したほうがよい。

以上のことから、氏の論文は、中国や日本の女性が抱える隠されたジェンダーの在り方への警鐘を目的とした芸術表現と、新素材を導入した漆芸の新規性という意味において評価に値する。論文中でタイトルに沿った結論がやや不足していると言う指摘もあったが、今後、論文の最終提出までに修正可能な範囲である。そのため、周逸喬氏の「ジェンダー意識を記号として取り込んだ漆造形表現」は京都市立芸術大学博士（後期）課程の学位論文として十分な水準に達していることをここに認め、審査教員全員一致の結論として合格とする。

#### 博士論文等審査結果の要旨（論文の評価）

周氏の博士論文では、自身の出発点である中国における制作から現在の博士後期課程での研究制作に至るまでを詳細に確認しつつ、個人のアイデンティティを中国の文化の中でのジェンダーに関する記号的意味への問いへと接続しつつ、漆表現の考察と新たな展望が示される。

第一章では、学部の卒業作品から研究留学生、修士課程に至る作品の流れを詳細に検討しつつ、その中でどのように漆作品の造形的変化が起きたのかを改めて確認し、古代中国の物語の登場人物をモチーフに選ぶことをきっかけとしてジェンダー意識における矛盾や問題点に気づいていったことが確認された。また、修士課程では3Dプリンター胎を立体造形作品の原型として用いる試みが開始される。

第二章では、制作を続ける中で疑問を感じていた女性性抑圧への異議申し立てを行う作家たちの表現について幅広く調査を行い、「中国のジェンダー問題についての関心の所在」と題して、改めてジェンダー意識のはらむ問題点や課題について調査、検討を行い、身体に関わる作品を先行作例として考察している。また周自身は、中国古来の演劇、京劇に由来する「蘭花指」という指の形に

注目し、女性性を連想させるこの指の形が様々な場面で登場し、時に男性に対する揶揄として用いられることにも気づいたことから、蘭花指を主なモチーフとして使用し、それが歴史的文化的にどのようなルーツを持ったものであったか、仏教の歴史も参照しつつ考察を行ってきた。

第三章ではジェンダーを表現する漆の作品に注目し、漆を用いた先行作例について取り上げ、考察がなされる。まず漆造形表現の持つ魅力を存分に表現していると考えられる作例を中心に、造形から読み取ることのできる抽象的価値を検討した上で、女性性をモチーフとして作品に取り入れている日本ならびに中国の漆作家たちを取り上げながら、それらがどのように、時代や地域、国籍からの影響を受けているかどうかを確認する。

第四章では、「イラスト作品から得られた手の記号」と題し、改めて自身の作品に登場する手の造形表現について詳細に考察し、台所での家事労働のイメージや伝統的男女性別役割分担という意識が手の表現に生かされることを再確認し、また中国の民俗的な配色からインスピレーションを得て赤と緑という配色を用いていることや、中国の切り紙図案を型紙として使用することを述べて、自らの制作と中国固有の文化的伝統との結びつきについて述べる。

第五章と第六章では、博士後期課程での取り組みを内容面技法面の両側面から取り上げるものである。第五章では単独の手をモチーフに、漆加飾の技法を用いた漆平面作品について考察を行い、第六章では「3Dプリンター胎における作品制作」について、中国での3Dプリンター胎使用例をあげながら、自身の独自性を示し、ウレタン下地を使用する漆の吹き付け飾りの作品の可能性について言及する。単独の手ではなく、半身像の漆造形作品を制作し、さらにバルーンの素材で再構築したパブリックアート作品も試みることによって、自身の作品の位置づけや今後の展開の方向性についても示されている。

論文全体を通して、中国において女性の性を象徴する身体的部位としての足と手をモチーフに、現代中国では未だ意識されることの少ない女性に求められる立場や、女性に向けられてきた眼差しについての問題提起を展開している。大学院進学後の主要テーマとしてきた手の表現に関して、氏は価値ある論を展開している。まず、仏教の印相と京劇の蘭花指との関係を指摘。そして、中国の清代以降に劇場の舞台に女性が上がることが禁止されたことで、男性が女性（旦）を演じる必要が生じたことや、その過程で男性演者が女性を表現する手段として蘭花指が考案されたことを明らかにした。このような背景を踏まえて、氏は手をモチーフにした作品を媒介として、旧態依然とした役割を求められる現代女性の立場に対する理解を要求している。

以上のことから、氏の論文は、中国の女性が抱える隠されたジェンダーの在り方への警鐘を目的とした芸術表現と、新素材を導入した漆芸の新規性という意味において評価に値する。